症例報告

若年者結腸癌の2症例と本邦報告例の検討

大阪府立成人病センター外科

福 田 一 郎 山 本 孝 紀 古 河 洋
小 山 博 記 岩 永 剛 青 木 行 俊
寺 沢 敏 夫

大阪府立成人病センター病理

石 黒 信 吾 谷 口 春 生

若年者結腸癌の2例を報告する。

症例1 19歳, 女性, 腹痛並びに血便を主訴に来院。下行結腸癌の術前診断で左結腸切除術を施行。切除標本では, 浸潤潰瘍型, 6.0×2.5cm 大, 組織型は高分化腺癌, 深達度は s, n (-)。術後12年経過する現在生存。

症例2 19歳, 女性, 下痢を主訴に来院。横行結腸癌の術前診断にて右半結腸切除術を施行。術中, 肝転移並びに多数のリンパ節転移を認めた。切除標本では, 限局潰瘍型, 10.0×9.9cm 大, 組織型は高分化腺癌, 深達度は s。術後2年2カ月で肝転移と癌性腹膜炎にて死亡。

若年者であっても腹痛等の症状があれば結腸癌の存在も念頭におく必要を述べ, さらに文献的に若年者結腸癌の特長等について検討を加えた。

I. 緒 言

20歳未満の若年者に発生する結腸癌はきわめて少なく, 我が国では今までに21例¹⁻²¹⁾の報告をみるにすぎない。我々は10歳代の結腸癌の2症例を経験したので報告する。

II. 症 例

症例1: 19歳, 女性。

初 診: 昭和40年1月21日。

主 訴: 腹痛, 血便。

家族歴: 特記すべきことなし。

既往歴: 13歳時, 腎炎。

現病歴: 6カ月前より, 血便並びに左下腹部痛有り, 軽度の労作で動悸を生じる様になった。

現症: 体格は中等大で栄養は普通, 脈拍は整で緊張良好, 眼瞼結膜は貧血様, 眼球結膜には黄疸なし。表在リンパ節は触知せず, 胸部異常所見なし。腹部はやや膨隆, 軟で左下腹部に手拳大, 硬, 凹凸不整の腫瘤を触知する。肝, 脾, 腎は触知せず。直腸指診にて異常なし。

検査成績: 赤血球数 276×10^4 , 血色素量6.3g/dl, 白血球数4800 (St. 8%, Seg. 62%, E. 0%, B. 2%,

Mono. 8%, L. 20%), 総蛋白7.9g/dl, A/G 比1.6。

糞便潜血反応 (+) (グアヤック法), その他とくに異常なし。

注腸X線所見: 下行結腸の下部に約8cm におよぶ狭窄像あり, 辺縁は不整。

以上より下行結腸癌の診断にて昭和40年3月18日手術を施行した。

手術所見: GOF 全麻下にて正中切開で開腹するに, 腹水はなく, 肝正常, リンパ節腫大も認めない。腫瘍は下行結腸の下部にあり左結腸切除術を施行した。

新鮮切除標本肉眼所見: 腫瘍は, 腸管の全周を占め, 浸潤潰瘍型で, 大きさは6.0×2.5cm であった (写真1)。

組織所見: 組織学的には, 高分化腺癌で, 深達度は s, リンパ節転移は認められなかった。

術後経過: 術後 MMC 10mg を3回, 計30mg 静脈内投与し, 経過良好で退院。その後エンドキサン1日100mg を30週間, 計21g 経口投与した。術後12年7カ月経過する現在, 健在である。

症例2: 19歳, 女性。

初診: 昭和42年10月4日。

写真1 新鮮切除標本(症例1)

写真2 新鮮切除標本(症例2)

主訴：下痢。

家族歴，既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：2カ月前より，下腹部鈍痛を伴う下痢有り。
1カ月前より微熱を生じるようになった，体重減少は
2カ月間に8 kg。

現症：体格は中等大で栄養は普通，脈拍は整で緊張良好，皮膚並びに可視粘膜に貧血，黄疸なし，表在リンパ節は触知せず，胸部異常所見なし，下腹部がやや膨隆し，臍のやや右下方に小児手拳大，硬，圧痛を有する腫瘤を触知する，肝，脾，腎は触知せず，直腸指診にて異常なし。

検査成績：赤血球数 337×10^4 ，血色素量 6.9 g/dl，白血球数 6800 (St. 27%，Seg. 45%，E. 3%，B. 0%，Mono. 10%，L. 15%) 総蛋白 5.9 g/dl，A/G 比 1.1，糞便潜血反応 (++) (グアヤック法)，心電図，洞頻脈，ST 中等度降下，負荷陽性，その他とくに異常なし。

注腸X線所見：横行結腸にかなり広範な crater を伴う陰影欠損を認める。

以上より横行結腸癌の診断にて昭和42年11月9日手術を施行した。

手術所見：GOF 全麻下にて正中切開で開腹するに，腹水を少量認めるも細胞診は陰性であった，腫瘍は横行結腸にあり，肝右葉に転移を認め，多数のリンパ節腫大を認めたが，右半結腸切除術を施行した。

新鮮切除標本肉眼所見：腫瘍は，腸管のほぼ全周をしめ，限局潰瘍型で，大きさは 10.0×9.0 cm であった(写真2)。

組織所見：組織学的には，高分化腺癌で，深達度は s であった(写真3)。

術後経過：術後エンドキサン 1200mg を静脈内投与を行い経過良好で退院，退院後エンドキサン 1日 100mg を147日間経口投与し，その後5-FU 250mg を隔日に1年間静脈内投与を行ったが，肝転移並びに癌性腹膜炎にて術後2年2カ月で死亡した。

写真3 組織所見(症例2)

III. 考 案

結腸癌は，50～60歳のいわゆる癌年齢に多くみられ，20歳未満はまれで，現在までに我々の調べ得た範囲では，本邦では21例¹⁾²¹⁾にすぎない(表1)。斉藤の集計²²⁾では，20歳未満は544例中1例(0.2%)，Rösch²³⁾によれば455例中1例(0.2%)とされ，当センターにおいても結腸癌は図1に示すように50～60歳代に最も多く，20歳未満は124例中2例(1.6%)のみであった。

最年少は，Kern²⁴⁾(1958年)が報告した9カ月の女児であるが，本邦では小林¹¹⁾(1970年)の10歳の女児例である。

性別については，自験例はいずれも女性であったが，20歳未満結腸癌の本邦報告例の集計(表1)では，男女比は3:1と一般の結腸癌と同様に男性に多くみられた。

発生部位は，一般の結腸癌が，S状結腸，盲腸に多いとされているが²²⁾²⁵⁾，若年者癌でも，Session²⁶⁾によれば，20歳未満結腸癌10例中5例(50%)はS状結腸であったと報告し，Middelkamp²⁷⁾は17歳未満結腸癌について検討しているが，S状結腸は69例中16例(23%)と最も多くをしめていた，本邦報告例ではこれとやや異り，

表 1 本邦における 20 歳未満の結腸癌症例

報告者	年度	年齢	性	主 要 症 状	部 位	術 前 診 断	組 織 型
塩 川	1935	18	♂	?	上行結腸	腸狭窄	?
大河原	1938	14	♂	腹 痛	回盲部	穿孔性虫垂炎	単純癌
岩 瀬	1958	16	♀	腹痛、嘔吐、腹部膨隆	横行結腸	腸閉塞症	円柱上皮癌
諏 訪	1961	19	♂	心窩部痛、腹満感	横行結腸	急性虫垂炎術後結腸狭窄症	膠様癌
西 野	1963	19	♂	回盲部痛	上行結腸	急性虫垂炎術後腸閉塞症	腺管状腺癌
田 中	1966	16	♂	腹痛、嘔吐、腹満感	横行結腸	結腸腫瘍	膠様癌
杉 本	1967	12	♂	イレウス様症状	下行結腸	?	粘液癌
杉 本	1968	17	♂	腹痛、発熱	肝彎曲部	急性虫垂炎術後腸閉塞症	粘液癌
矢 島	1969	11	♂	右季肋部痛、腹部腫痛	横行結腸	横行結腸癌	印環細胞癌
宮 野	1969	13	♂	腹痛、嘔吐	上行結腸	急性虫垂炎、術後腸閉塞症	粘液癌
小 林	1970	10	♀	腹痛、血便、腹部腫痛	下行結腸	結腸癌	乳頭状腺癌
管	1971	12	♂	腹痛、腹満感	下行結腸	腸閉塞症	粘液結節性腺癌
山 田	1972	18	♂	右下腹部痛	上行結腸	虫垂炎	乳頭状腺癌
朝 日	1973	17	♀	腹 痛	横行結腸	腸閉塞症	乳頭状腺癌
田 村	1973	17	♂	腹痛、嘔吐、腹部膨満	横行結腸	腸閉塞症	乳頭状腺癌
星 野	1974	13	♂	腹痛、嘔吐、発熱	横行結腸	汎発性腹膜炎	粘液性単純癌
秋 本	1974	17	♂	便秘、粘血便、全身倦怠感	S 状結腸	S 状結腸癌	粘液結節性腺癌
大 田	1975	13	♂	腹痛、発熱、腹満感	下行結腸	腸閉塞症	粘液性未分化癌
中 村	1975	14	♂	右上腹部痛、発熱	肝彎曲部	右上腹部腫痛	乳頭状腺癌
山 際	1975	14	♀	?	S 状結腸	S 状結腸狭窄	乳頭状腺癌
中 埜	1976	12	♂	腹痛、腹満感	肝彎曲部	腸閉塞症	乳頭状腺癌
自験例	1977	19	♀	左下腹部痛、血便	下行結腸	下行結腸癌	高分化腺癌
〃	1977	19	♀	下腹部鈍痛、下痢	横行結腸	横行結腸癌	高分化腺癌

図 1 年齢別結腸癌症例数
(大阪成人病センター、昭36.7~昭50.12末)

横行結腸に23例中8例(35%)と最も多く、S状結腸は2例(9%)と少なかった。

若年者結腸癌の術前診断は、Middelkamp²⁷⁾によれ

図 2 20歳未満結腸癌症例の予後
(本邦報告例中記載のある19例について)

ば、術前診断のなされた51例中腫瘍と診断されたのは21例にすぎず、その他結核性腹膜炎11例、腸閉塞7例、虫垂炎6例、その他1例となっている。本邦報告例においても結腸癌とされたものは23例中5例にすぎず、若年者では、腹痛等の腹部症状を訴えているにもかかわらず、腸閉塞症、あるいは虫垂炎等の疾患と診断されているのが多い。若年者であっても、腹痛等の症状があれば、結腸癌も念頭におく必要があると思われる。

組織型は、一般の結腸癌では、高分化腺癌が大部分

で、粘液癌は少ないが、若年者では粘液癌の頻度が高いのが特長である。Middelkamp²⁷⁾によれば粘液癌は若年者結腸癌の約半数をしめ、Session²⁶⁾によれば11例中7例(64%)が粘液癌であったと述べている。我々の症例は2例共高分化腺癌であったが、本邦の集計でも膠様癌あるいは粘液性の癌が23例中10例(43%)と比較的多くをしめていた。

若年者結腸癌の母地病変として、潰瘍性大腸炎、家族性大腸ポリポーシス等があげられているが²⁷⁾²⁸⁾、本邦例では山際²⁰⁾が14歳女児の多発性ポリープの癌化例を報告している。しかしその家族歴の詳細は不明である。

若年者結腸癌の予後は、自験例のように10年以上生存しているものもあるが、1年以内で死亡している症例が多く、予後不良である(図2)。その理由としては、病理組織学的特長、すなわち早期に転移を生じやすい粘液癌が多いこと³⁰⁾や、細胞、配列の異型度が強く、浸潤性が強いこと³¹⁾、および若年者にはまれな疾患であるので発見時期が遅れるためであると考えられる。

IV. 結 語

19歳女性の結腸癌の2症例を報告し、若干の文献的考察を加えた。

本稿の要旨は昭和52年6月4日、第121回近畿外科学会において発表した。

文 献

- 塩川五郎：塩田外科に於ける結腸癌の統計的観察とその遠隔成績。日外会誌，36：632-655，1935。
- 大河原健男：若年者上行結腸癌穿孔による腹膜炎の1例。日外会誌，39：313-314，1938。
- 岩瀬和夫ほか：若年者に発生した横行結腸癌の1例。外科，20：590-592，1958。
- 諏訪真澄ほか：若年者結腸癌の1例。日消会誌，58：887-888，1961。
- 西野宗治ほか：若年者上行結腸癌の1例。癌の臨床，9：611-612，1963。
- 田中 陽ほか：若年者結腸癌の1例。外科診療，8：874-876，1966。
- 杉本雄三ほか：若年者結腸，直腸癌の4例。日外会誌，68：131，1967。
- 杉本雄三ほか：若年者結腸癌の追加例。日外会誌，69：118，1968。
- 矢島義夫ほか：小児消化器癌の4例，手術，23：1074-1078，1969。
- 宮野 武ほか：小児結腸癌の1症例。小児科，10：492-497，1969。
- 小林隆治ほか：若年者にみられた結腸早期癌の1例。日消会誌，67：816-817，1970。
- 管 英典ほか：若年者結腸癌の1例。外科，33：520-523，1971。
- 山田 肅ほか：若年者の下部消化管癌—若年者大腸癌。胃と腸，7：881-888，1972。
- 朝日竹四ほか：若年者結腸癌の1例。信州医誌，21：630，1973。
- 田村欣一ほか：若年者結腸癌の1例。臨外，28：145-147，1973。
- 星野 豊ほか：小児結腸癌の1例。日小外誌，9：719，1974。
- 秋本龍一ほか：若年者結腸癌の1例。外科診療，16：426-429，1974。
- 大田政広ほか：若年者結腸癌の1例。日小外誌，10：787-793，1975。
- 中村孝哉ほか：小児結腸癌の1症例と本邦報告例の検討。日臨外，36：726-730，1975。
- 山際裕史ほか：近親結婚家系に生じた若年者大腸癌の1例。臨外，30：759-762，1975。
- 中埜 肇ほか：若年者結腸癌の1例—本邦報告例との検討—。外科診療，18：969-972，1976。
- 斎藤 明：岩永外科教室に於ける結腸癌の統計的観察。日外会誌，63：104-112，1962。
- Rösch, W.: Dickdarmkarzinom bei jugendlichen Patienten, Zentralbl. f. chir., 24：1502-1504，1975。
- Kern, W. H. et al.: Adenocarcinoma of the Colon in a 9-Month-Old Infant, Cancer, 11：855-857，1958。
- Haubrich, W. S. et al.: Malignant Tumors of the Colon and Rectum. Gastroenterology, edited by H. L. Bockus, 2nd Ed. 1009-1044, W. B. Saunders Co, Philadelphia, London, Toronto, 1976。
- Session, R. T. et al.: Carcinoma of the Colon in the First Two Decades of Life, Ann. Surg., 162：279-284，1965。
- Middelkamp, J. R. et al.: Carcinoma of the Colon in Children, Pediatrics, 32：558-571，1963。
- Miller, F. E. et al.: Adenocarcinoma of the Colon and Rectum in Persons under Thirty Years of Age, Amer. J. Surg., 113：507-510，1967。
- Clutts, G. R. et al.: Carcinoma of the Colon in Children under 16 years of age, Amer. Surg., 30：671-676，1964。
- Harvey, D. R.: Multiple carcinomas of the large and small bowel in childhood, Postgrad. Med. J., 51：672-676，1975。
- 陣内伝之助ほか：若年者大腸癌。外科治療，23：121-126，1970。

(昭和52年11月21日受領)

Case Reports

I. Colonic Tuberculosis and a Duodenocolic Fistula Associated with Carcinoma of the Transverse Colon

S. Kobayashi

Department of Internal Medicine, Aichi Cancer Center Hospital

E. Yamada

Department of Surgery, Aichi Cancer Center Hospital

S. Hosoda

Laboratory of Pathology, Aichi Cancer Center Research Institute

H. Mizuno

Department of Internal Medicine, Aichi Medical College, Aichi

A case is reported of carcinoma of the transverse colon complicated with a duodenocolic fistula and tuberculosis of the colon.

A 41-year-old woman was admitted for surgical treatment of a round, firm, relatively smooth mass in the right hypochondrium.

Barium enema revealed an annular filling defect in the transverse colon close to the hepatic flexure and two skip lesions with irregular mucosal surface seen distally.

Exploratory laparotomy was performed and the tumor mass could not be removed because of presenting a large mass involving the duodenum and head of the pancreas. Two weeks later, the patient began to vomit fecal materials frequently and a duodenocolic fistula was proven radiographically.

At autopsy the carcinoma of the transverse colon involved the second portion of the duodenum forming a duodenocolic fistula and two skip lesions seen distally were histologically proven to be tuberculous.

No previous report of such a case has been found.

II. Carcinoma of the Colon under Twenty Years of Age — Report of Two Cases with Reference of Japanese Literature —

I. Fukuda, T. Yamamoto, H. Furukawa, H. Koyama,

T. Iwanaga, Y. Aoki and T. Terasawa

Department of Surgery, The Center for Adult Diseases, Osaka

S. Ishiguro, H. Taniguchi

Department of Pathology, The Center for Adult Diseases, Osaka

Carcinoma of the colon is an exceedingly rare occurrence in persons under 20 years of age. Only 21 of these cases have been reported in the Japanese literatures. Two additional cases were reported.

Case 1. A 19-year-old female with a complaint of bloody stool and pain in the left lower abdomen. Preoperative diagnosis was carcinoma of the descending colon. At surgery there was no evidence of metastasis and she was treated with resection of distal transverse colon, and proximal sigmoid colon. No recurrence has been observed during 12 years after surgery.

Case 2. A 19-year-old female with a complaint of diarrhea. Preoperative diagnosis was carcinoma of the transverse colon. Liver metastasis and extensive mesenteric lymph node involvement were found on exploration of the abdomen. She received right hemicolectomy but died of the disease 26 months after surgery. Histologically, both cases were well differentiated adenocarcinoma.

Scientific Articles

1. Colitis Caused by Unknown Etiology

S. Okita, M. Miyaoka, K. Eto, E. Matsumoto, C. Koizumi, K. Sasaki,
M. Hayashi, Y. Sakai & S. Ashizawa
Department of Medicine Tokyo Medical College, Tokyo

Seventy two cases of colitis caused by unknown etiology were studied. All of them have following symptoms: bloody stool, abdominal pain and diarrhea. Endoscopic findings of their colonic mucosa are edematous swelling, hyperemia, hemorrhagic tendency, bleeding fleck, untransparency of submucosal vessels and so on. Only 8 cases among them showed some abnormalities of mucosal surface on the double contrast lower G.I. X-ray examination around the same portion as seen on colonoscopy. The solitary lesion located in the rectum in 64 cases, while in 8 cases it was seen in the proximal part of the colon. The clinical entity and course of these lesions are discussed.

2. A Clinical Studies on Inflammatory Diseases of the Colon

S. Iwabuchi, A. Kimura, H. Arai, N. Miyata, H. Suzuki,
O. Miho and F. Nagao
Second Department of Surgery, Jikei University School of Medicine, Tokyo

Since 1972, a total of 28 cases with inflammatory diseases of the colon, namely 11 cases to irradiation proctitis, 6 of colitis ulcerosa, 2 of Crohn's disease, 3 of colitis tuberculosa, 2 of non-specific ulcer, one of Behçet's disease and 3 of others, were treated in the authors' surgical department (Aoto Hospital).

All of these cases were actively examined by roentgenographic examination, angiography, fiberoptic colonoscopy and fiberoptic biopsy. It was interesting that all cases of